

飛鳥

2013年

盛春号

第178号

かわら版

ASUKA KAWARABAN

発行所

飛鳥出版室

発行人 永野 正将

〒780-0945 高知市本宮町65-6

電話 088-850-0588

e-mail: info@asuka-net.jp

http://www.asuka-net.jp



「新緑」 南 安廣

今年の桜はとても早足に行ってしまった。
新たな門出の日を待たずに行ってしまった。
その代わり、
緑がいつもより早くぼくたちを迎えに来た。

新緑とその向こうに広がる春の空
きみたちと少し長く過ごせる
そんな春があってもいいか。

言葉を紡ぐ 2	2
私の出版体験談	『戦国刀匠譚』式部 静 4
キルギスタンからコンニチハ ⑤④.....	氏原名美 5
いろいろかいる 九.....	安藝真一 6
文章カレベルアップ講座 (8).....	水木和香 7
ヒナタクサイ日記 ⑭.....	やまげんらう 8
出版物紹介.....	9
わが家の太郎 ㊟.....	永野雅子 10

飛鳥「かわら版」は、あらゆる世代の自分史・個人誌作りを応援します。

言葉

を紡ぐ〈2〉



夜七時頃であった。テレビのニュース番組を見ていると、携帯電話の着信音が聞こえてきた。ニュース番組の中の音にしては、ただらと続く着信音だな、と思いつながらテレビに見入っていた。テレビの画面が切り替わっても不快な携帯電話の着信音は流れている。ここまで鳴り続けると、さすがにテレビの横に置いてあった私の携帯電話の音であることに気づく。この時間帯に掛かってくる電話の多くは、時間外の仕事の話か、女房への取次ぎ電話が多い。

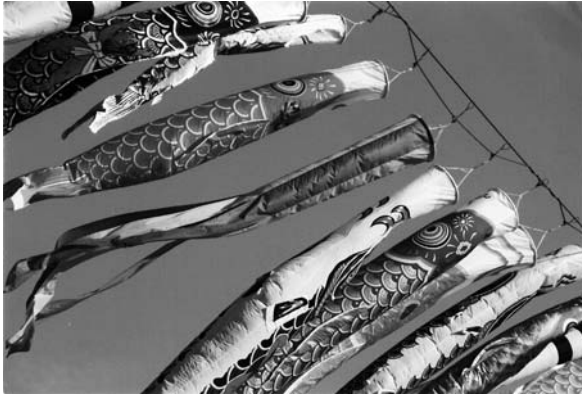
私にとっては、一日で一番リラックしたゆとりの時間であり、電話を取るのには抵抗感があった。暫く放って置いたが、何時までたつても鳴りやまない着信音に苛立ち、仕方なくチャリと電話のディスプレイ表示を覗いてみた。私の携帯電話には登録されていない人の電話番号である。恐らくは仕事先からの呼び出し電話だとの予感に、電源を切るはずが、誤って通話ボタンを押してしまった。

それにしても、今回は考える余裕すら与えてくれない強引な口説きである。「一週間後です。宜しくお願います」と簡単に押し切られてしまった。投稿依頼が舞い込んで来る様になると、私もいよいよ作家としてデビューか、と一瞬喜びが頭の中を過ぎる。続いて、千五百字は原稿用紙で何枚になるのか計算を試みた。最近はパソコンばかりに頼っていて、学生時代以来、原稿用紙を使用した記憶は無い。原稿用紙一枚は、四百字であるから、千五百字は原稿用紙三枚半くらいか。この程度の枚数であれば、頑張つて出来ない枚数ではない。しかし、部屋の窓を開け深呼吸をし、依頼原稿の件を冷静に考え始めると、喜びはたちまち息苦しさ

文・写真 小谷 了一



南太平洋



「男は老後にひとりで楽しめる趣味を持たないと」
小谷さんにとっては、文章を書くことも、写真を撮
ることもそのひとつ

に変わってきた。テーマを決められ、締切を設定され、原稿用紙の枚数まで決められてしまうと、例え三枚半の原稿であっても私にとつては苦痛になる。

妄想が始まった。

私はプロの作家であり、旅館の一室に閉じ込められている。中年の女性編集者が言う。

「先生、締切日になりましたが、急いでください」

「うん、分っているよ」

女性編集者は焦っているが、素知らぬ顔でブランドグラスを傾け、葉巻をくゆらせ原稿を書こうともしない……

これはテレビドラマという虚構の世界ではあるが、部屋の一室に籠もり何百ページもの原稿を書き上げていく姿を想像すると、私には出来ない！ 私の文学（文学というほどの大層なものではない）はあくまでも道楽であり、エッセイであれ短歌であれ遊びなのである。金にはならないが、書く事が楽しいのであって、これを職業として追い詰められる作家人生は想像するだけで息が詰まる（なれる筈もないが）。文学はあくまでも趣味道楽の範疇での楽しみが最高である、改めて自覚する事が出

来た事件であった。

さて、文学に目覚めた動機は何かと改めて問われると、返事に窮してしまふ。

私には、周りの人や家族に迷惑をかけ続けながら九十歳で天寿を全うしたイゴツソウ（土佐の頑固者の意味）の父親がいた。父のイゴツソウ振りや高知県でも絶滅危惧種に指定される程で、この様な人は映画に出てくる車寅二郎（トラさん）と親父くらのものである。

父の三回忌が終わると、父の生き様に対する反感と羨ましさが入り混じる複雑な思いで、父のイゴツソウ振りを子々孫々にまで伝えてやると、覚悟して書いたのがエッセイ「一枚の絵葉書」であった。それがたまたま高知県出版文化賞を受賞しただけであり、文学に目覚めたと言われれば気恥ずかしくなってくる。高知県出版文化賞に応募する時にも、推薦文を書いてくれる人は無く、怖いもの知らずに未知の世界へ挑戦した。

大原富枝文学賞については、高知県出版文化賞を頂いた事が何かの間違いだったのでは、という疑念と自信の無さからチャレンジし

たのであった。

この時でさえ、大原富枝文学賞の重みを自覚しておらず、無鉄砲に挑戦した結果、優秀賞を頂く事ができただけの話であり、今になつて、一生涯の幸運を使い果たした感がしている。

文学に対する感想はと問われれば、お金が掛からない、誰にも迷惑を掛けない良い趣味だとは思いますが、仕事にはしたくない。

此処まで書いてくると、飛鳥出版室の締切日が頭を過ぎり、胸苦しくなってきた。

「文学なんて、お前には無理だ。馬鹿な事は止めておけと最初から言うたやろ！」という親父の怒鳴り声まで聞こえ始めた。

こちら辺で終わりにし、寝酒としよう。妻に内緒で。

いつまでも眠らんとして

眠られず

酒一合で夢にまぎれむ



おだに りょういち

高知県四万十市出身。奈良県立医科大学卒業後、高知大学医学部助教授、

高知県立中央病院放射線科医長等を

経て、小谷放射線科・内科、クリニ

ック土佐久礼を開業。現在、医療法人小谷会理事長。

著者にききたい!

私の出版体験談

『戦国刀匠譚』 式部 静

この本は、土佐の研ぎ師で鑑定家の濱田晃信師の思い出を後世に残すために出版しました。私は、困難に直面したときや先の見えないう岐路で、人生の師である濱田翁から多くの教えを受けました。師が去った今も、足跡をたどれば進むべき道が目の前に開け、年齢を重ねることに有難さが身に沁みます。

師は、世にも稀な審美眼の持ち主で、その能力を刀剣鑑定と研磨の分野で発揮していました。しかし、能ある鷹は爪を隠すの譬え通り、表に出る事を避け、自らの事績を韜晦して世を去りました。

本のテーマである戦国時代の刀鍛冶は、師の姿です。自らが持てる能力を遺憾無く発揮し、時代が求める最高の仕事を成し遂げて、名を残すことすら望まずに生涯を終える。それでも、優れた作品はたび重なる戦乱や天災を潜り抜けて今日まで伝わり、自ら光を放っています。良い仕事は、いつの世でも認められ、深い感動を残します。

師から学んだ刀剣鑑賞の分野で、刀剣が最も多く消耗された戦国時代の刀鍛冶を顕彰したいとの願いも込めました。戦国という過酷

な時代には、どんな名刀でも持主の命を守る為に惜しげも無く使われました。いつの時代にも武士は刀をこよなく愛し、片時も身辺から離しませんでした。武器としての機能だけでなく、丈夫で使い易ければ十分で、実際そのような粗製品も沢山あります。しかし、武士は、刀剣に実用を超越した靈力を求め、刀鍛冶もまた期待に応えて持主守護の祈りを込めました。武士は、生死の間の最後の拠り所として手に入る最高の刀剣を望み、それらの多くが務めを終えて廃棄されました。今に伝わる名刀は文化遺産であり、造った刀鍛冶の技術と精華と祈りの誠をお伝えしたいのです。

もう一つの願いは、次世代へ刀剣趣味を解り易く伝承する事です。併せて、刀に興味をお持ちの方々に対し、難解な刀の話を小説の形にすることで、鑑賞の手引きにして戴きたいとの想いも込めました。この本が、少しでも役立てば大変嬉しく思います。

今、思い起こしますと、当初はどんな形でも世に出ればそれで十分だったはずの私の胸中で、次第に「もっと良いものを」と、欲が渦を巻き始め、校正が推敲に、訂正が加筆になって終わりが見えなくなり、本当に困りました。しかし、そうした経緯を経てきた甲斐あってか、読者の方からは、「思いが伝わり、感動が涙を誘う」といった趣旨の感想を戴きます。初めての出版に際しまして、裏側で支えて下さった方々へ深く感謝いたします。

(しきぶ しずか/高知市)

第57回高知県出版文化賞受賞!

『戦国刀匠譚』 式部 静

当社で出版した、式部静さんの『戦国刀匠譚』が第五十七回高知県出版文化賞を受賞しました。

授賞式での選考委員の書評では、「馴染みのない専門用語が多様されていて、はじめはとまどうが、説明にも細かく心が配られており、また著者の鋭い切れ味の文章力が先を読み進ませ、読後に満足感を与えてくれる。とても素晴らしい内容です」と大変評価の高いものでした。

刀の事に全く無知な私でもよく分かり、物語としても大変面白く、刀に対する興味が深くなりました。高知市内書店及びアマゾンでも購入出来ますので、是非皆さんにも読んでいただきたい一冊です。

(川田)



出版文化賞を受賞された式部さん(左)



うじはら なみ
高岡郡越前町生まれ / 北大でロシア語を学ぶ / 2001年からキルギス在 / 国立ビジネス科大学日本語日本文学科学科長

春が来た

「飲めや謳え」のその先は…

氏原名美

十二月には零下二十度を下回る日が続く。電気がガスの使用量が一挙に膨らんだ。あつという間に国内の電力もガスも底をつき、ガスは供給ストップ、電気は夜間十二時間の計画停電。厳しく長い冬を覚悟した戸建の住人達は、慌てて石炭ストーブに切り替えた。ところが、一月の終わりを待たず、冬はあつけなく終わりを告げた。「春が近い」と、みなワクワクしていた。

キルギスでは、一月、二月、三月と祝日が続く。大晦日から元旦にかけてドンチャン騒ぎ、七日はキリスト降誕祭でロシア正教徒だけでなく自称イスラム教徒にとつても二度目のクリスマス。十四日は旧暦の正月で飲めや歌え。二月は祖国を守る男達の祭、三月八日は国際女性デー。すべてが宴会の口実だ。大学でさえ、前日には授業を取りやめ教職員が構内で盃を傾け前夜祭に興じる始末。そしていよいよ春分の日、「ノールズ」と呼ばれる春の大祭典だ。
中央アジアは三月が年の初め。三月生まれは男も女もマイラムと

いうことばに困んだ名が多い。「祭典」とか「祝い」という意味だ。三月は、新春を迎える嬉しい季節なのだ。その気持ちは分かる。しかし、またもや前日の授業が消える。

ノールズの前日は大学で一大イベントを企画する。ボズ・ユイ（キルギス伝統のフェルト製テント式移動住居）を組み立て、来賓を招き女子学生たちの手料理が振舞われる。屋外ステージでは歌舞音曲担当班の、やはり女子学生たちが民族楽器の演奏と歌謡ショーを繰り広げ、教職員はごちそうのお裾分けに預かる。以前は祝日その日に行っていた祭典だが、休みをつぶしたくはない、しかし祭りの気分には浸りたいという当局の「計らい」が、このところは前日がお祭り騒ぎとなっている。

気の毒なのは女子学生だ。各国料理コンテストというのがあり、自分が学ぶ言語に合わせた料理を「出品」しなければならない。予算は限られている。日本語の学生は周りから「寿司を！天ぷらを！」と期待されるが、海の無い土地で

魚は高価な食材だ。野菜はまだ多くが市場に届いていない。和食は高くつくのだ。

「君作る人、僕食べる人」というコマーシャルが世間の響響を買ってテレビから姿を消したのはずいぶん昔だが、ここでは未だに当然の役割分担。男にも作らせる、と毎年抗議するが誰も聞く耳持たず、「女はつるさいこと言わず、上の言うことを聞いて祭を盛り上げる」と、パワハラとセクハラの狂騒曲だ。

二月の末にアタムバエフ大統領が訪日した。キルギスには政変以外、概して無関心な日本のマスコミだが、「両陛下、キ大統領とご歓談」と、皇室関連のニュースがあった。「日本の近代化に学びたい」と言う大統領に対して、天皇陛下は「日本は明治以来、国を挙げて教育に力を注いできましたからね」とお答えになったとか。

教育そのものの「祭」を手段に国家国民意識の高揚に努めているかのキルギスだが、せめて、その前途が華燭の如く明るいものであることを祈りたい。

いっせ
かっせ

その九

かわら
瓦 安藝員一

夏の盛りに戦争が終わった。「終戦」という言葉がひろがるうちに秋風立ちこめ、やがて、師走。戦争には負けたにせよ、こともなく正月は明けた。私の生家の京町から新京橋にかけては堀川と橋に囲まれた広場で、繁華街が交叉する盛り場。正月とあらば繰り出して来る人波に見世物小屋や物売りが奔めき合つて連なっていた。テント張りの見世物はどれもこれも怪しげで、例えば「蜘蛛娘」の花ちゃんが見物の掛け声に毛だらけの八本の足を挙げてニツコリ笑つて見たり、又、「土佐山の大蝨」というのは、木戸銭払つて黒幕をくぐると中は暗闇。蠟燭ぼんやり照らす中に、厚さ五センチ程の木板が立てかけられて蝨があつた暗がりから今にも出て来るかと息つめると、厚板の上から血の色をした液体がズルズルと流れてくる。震える耳に、口上あつて「これが大板の血！ オオイタチ！ 大蝨！ 騙されたぞ知り乍ら、なにやら納

得した見物衆は出口に向かう。小屋のまわりは、物売り、輪投げや射的、手品、五目ならべと香具師の面々に人だかりの渦がつづく。

その中に、「忍術六法の書」売りの男が居た。私はどの見世物小屋の入場料を節約してもこの本だけは欲しかった。しかし小学四年生には手の出しようもない値の本で、買えないのに何度も人の輪に潜り込んで忍術本の説明を聞き続けた。何しろ、この本を読みさえすれば、谷にかかる丸木橋を滑らずに必ず渡れる。とか、水の上をスイスイと歩ける。とか。要するにこの忍法の本を買つて読まない事には極意が判らない。金が足らん。買いたい読みたいと私は思い続けた。人だかりの先頭に立つて口上を聞いてみると、突然、男が私の腕を掴んで群れの輪の真ん中に連れ出し、「ボク、どこから来た？」「京町から」と私。男は「俺はこの子の知り合いで何でもない。こんな子供でもこの本を読めばたちどころに忍術師。それを今、見せちゃるき！」と大声を放つ。「ここにあるこの厚い瓦。これを額で一発で割る忍法。それをこの子に読ませる。この子が読んで瓦が割れたら、この本の中身

は嘘じゃないがや！」群衆はシーンとなつた。「本が読める！」私は興奮した。胸が高鳴り辺りの景色がかすんだ私に、男が本を開いて「ほら、ここを口に出さなく読みや。皆に聞こえんように、見せんように！」その頁にはこうあつた。瓦を振り上げたら臍の下、三寸に力をこめて息を止め、額に一気に振りおろすこと。興奮で私の耳が熱くなつた。瓦を振り上げ秘法通りの臍下の力、振りおろす！ 瓦は真つ二つに割れた!! 見物はどよめき唸り、拍手の波に金を差し出す腕が何本もつき出され、男はそれと引きかえに忍法の本を次々と渡していく。

私は走り出した。祖母のいる愛宕町の家へと息はずませ飛んだ。着くなり「おはあちゃん！ 瓦はどこにある!?」祖母は「瓦？ 瓦は屋根の上よね」「梯子は？」と私。「どつするがぜよ」の祖母の声を背に登つて屋根瓦の厚目の一枚を抜いて降り、畑に面した庭の坪に立つて「おはあちゃん！ 見よりよ。今からこの瓦を僕の額で割るき！」「なんつぞね」と訝しがる祖母の眼をそらして忍法通りの臍の力、瓦を一思いに額に降り降ろす！ 途端にすさまじい痛さ

が頭にひびいて、瓦は割れずにゴロリと地に転がる。額から熱い血が吹き上げて眼の中に流れ込む。祖母は縁側から転がり落ちて駆けより、手拭いで力強く私の額を押しさえ込んだ。

幾年も経ち幾度もこの話を知人や友人に聞かされた。皆一様に笑うが、割れなかつた瓦の原因には誰も無言だつた。六十年あまり過ぎた或る日、又々この経験を知人に話した時も、初め割れて二度目が割れない不可解のまま別れの帰途、突然、天啓が閃いて謎が解けた。そうか！ 広場での実演の時の瓦には仕掛けがあつたに違いない。かねてより割つた瓦を巧妙に貼り合わせてあつたのだ。ならば忍法なくとも瓦は割れる。祖母の家の瓦には仕掛けなぞある筈もない。果然と私はあの日のあの広場の風景にさ迷い込んでいく。

それにしても、このトリックに気が付くのに要した長い日々。話を聴いてくれた友人誰ひとり解決しなかつた暗闇。私の迂闊を半世紀も封印する事に成功した男の呪縛こそ忍法ではなかつたか。割れなかつた瓦を前に額から流れ落ちる大蝨の血にも似た感触の中に、あの男の影を私は見ている。

高度な表現方法「比喩」

水木和香



みずき わか
高知市在住。フリーライター、
生涯学習コーディネーター。
文章教室や漫画の原作教室など
高知市を中心に開催している。

自分の言いたいことを伝える時、
「たとえば みたいな」とか
「まるで のような」という表
現の仕方をする。これが比喩
です。

比喩を使えば情景を生き生きと
伝え、言いたいことを相手に実感
させることが出来ますので、気の
利いた比喩は文学作品には欠かせ
ません。

直喩(ちよくゆ)
たとえていることがはっきり分
かる言葉(「ように」,「みたいに」
など)で表現する方法です。
・息子は坂本龍馬のように、希望
に燃えていた。

隱喩(いんゆ)
「まるで」「よくようだ」「の
ごとし」などの言葉が用いられて
いませんが、これも比喩です。
・夜の帳が静かに幕を下ろした。

言葉が定着した結果、「すし詰め状
態」「団子レース」「鉄のカーテン」
のように、定型句になってしまっ
たものもあります。

換喩(かんゆ)
表現したいものを、関係の深い
もので代用する方法です。

・ペンは剣よりも強し。
実際にペンと剣で戦えば、ペンの
方が負けるでしょう。この場合のペ
ンは言論や学問や思想を、剣は武力
や戦争を比喩しています。

提喩(ていゆ)
全体と一部分、物体と材料とい
った関係を用いて表現する方法で
す。

・手が足りない
手そのものではなく、仕事をして
くれる人が足りないことを表してい
ます。

これらの比喩では、書き手と読
み手が共通の概念を持つているこ
とが肝心です。「炭団たどんのようだ」
は、炭団そのものを知らない若者
には黒さが伝わりません。「ダイ
ヤルを回す」や「リンと鳴った」
も、ケイタイやスマホ世代にはピ
ンと来ないのでしょね。

漫画原作教室

水木さんが講師をつとめる漫画原作教室
の第7回受講生を募集しています。お問い
合わせは下記センターまで。
日時：平成25年7月6日(土)より毎週土曜日
14:00~16:00 全12回(月4回×3ヶ月)
受講費：4,000円/月
場所：NPO高知県生涯学習支援センター
高知市大原町132番地 高知県教育センター分館 南棟
TEL 088-833-0022
募集締切：平成25年7月1日(月)

雑書き

近年、花と同時期に葉をつ
けている桜をよく見かけるよ
うになった。幼い頃に「桜は
花が散ってから葉が出る」と
教わった記憶があるのだが。
これも気候変動と関係がある
のかなあ。(上)

高知県出版文化賞は、一九
五六年に始まった最も伝統あ
る地方文化賞です。今年は一
八作品の応募があり、その中
から五作品が受賞(四頁を読
んでね)されました。

この賞に毎年応募出来てい
る事。そして、二〇一一年は
吉良川文張様の「幕末の土佐
清岡道之助」、二〇一二年
は小谷了一様の「一枚の絵葉
書」、今年は式部静様の「戦
国刀匠譚」と続けて受賞でき
た事は本当に嬉しいです。今
年も素晴らしい一冊に出会え
ますように。

ちなみに「戦国刀匠譚」の著者
式部しきぶ(静しずか)様とても
きれいなまます(は)男性です。
びくりです。

(中)



三月二十一日。校庭の桜が六分咲きだったこの日、娘みよみよこの卒業式があった。

会場は小学校の体育館。卒業生の保護者たちは、卒業生や在校生よりも早く入り、五年生が設えたパイプ椅子に座る。「号泣用にハンカチは二枚用意したよ」と言うのは隣の席のお母さん。みんな、ケータイの電源を切ったり、カメラの電池を確認したり。そうしているうちに入場してきた小さな一年生を見て、「うちの子もあんなやったのに」と誰かがつぶやき、みんなでうんうんと頷く。保護者席は妙な一体感だ。

一年生が開会を告げると、六年生九十六名が音楽とともに入場。アイドルみたいな女の子たちと、スーツ姿の男の子たち。ふだんより大人びて見える彼らを見て、もうハンカチを濡らしているお母さんがいる。今日までの数週間、毎日卒業式の練習があった。その成果なのだろう。舞台に設えられたひな壇に座る六年生は姿勢よく、関係者や来賓が呼ばれるたびに、全員一斉に立ち上がり、美しいおじぎをした。

校長は「あなたたちは、学習や研究のテーマを自分たちで決め、

実行してきました」と語った。「とくに思い出すのは、二年前の東日本大震災の二日後のこと。まだ混乱が続き、なにかしなければと思いつつ呆然としている私たちに、四年生だったあなたたちは『募金活動をさせてください』と言ってきた。私たちは目が覚める思いでした」(募金活動は全校へ、地域へと広がり、集まった金額は四十万円を超える)

地域の大人や教育関係者から高い評価を得ている彼らだが、最初

よみかき自由会

卒業式

by やまげんらつ

(香南市在住)



からそうだったわけではない。六年前の入学式には、騒いだり席を立ったりする児童が目立ち、いさめるために睨みつけた教員に「先生、もっと怖い顔して」と挑発した。そういう児童は一部だったが、全体的にダラダラとまとまりが悪

く、教員から何かとマークされる学年だったのだ。視察にきた教育機関の専門家に「全国一姿勢の悪い一年生」と言われたりもした。先生方は、悪目立ちする児童に手一杯で、ほかの児童に目配りする余裕がないように見えた。

そんな状況が変化しはじめたのは二年生の一学期だ。声の大きな明るい先生が学年主任になった。彼女は最初の懇談会で、「子どもがいい方向へいくように、褒めて育てましょう」と言い、指導の路

線変更を宣言した。以降、課外授業がたくさん設けられ、多くの大人たちに見守られながら児童は成長していく。川の水質調査、農業実習、動物園のガイド研修。学年が上がるとグレードアップして、商店街の活性化、老人ホームへの

慰問活動、平和学習発表など。関わった大人たちは、彼らの熱意と熱心なメモ取りに驚き、褒め称えた。活動を通して、児童は自分たちの良さを知り、頑張りが誰かの役に立つ喜びを覚えた。「褒めて育てる」の勝利である(と私は思うが、先生は「同じように指導してもこれほど効果が出たことはない」と言っていた。よほど児童たちに合っていたのだろう)

実は、変わったのは児童だけではない。態度が悪いのは、保護者も負けてはいなかった。参観のときに私語が多く、授業の邪魔になっていたのは保護者の方である。

だが、夜に呼び出されてクラスの問題を話し合い、行事のたびに子どもを成長を目的にしたりすることで、私たちは保護者として鍛えられ、子どもにリードされ、育てられた。そうして今日、卒業式の席に座る保護者たちは、みんなおだやかに微笑み、いい姿勢で話を聞いている。

『この一年間、全学年のリーダーとして立派だったあなたを誇りに思います』校長のことはが体育館に響き、保護者の鼻をすする音が大きくなった。窓の外に、桜の花びらが風に舞っていた。

株式会社 飛鳥 ASKA CREATIVE
あなたの「ほい」をカタチにします

飛鳥 Web サイト
リニューアル準備中!

近日公開!

ASUKA KAWARAHAN

飛鳥のウェブサイトが新しくなります。

私たちのこと、私たちの仕事のことを
知って頂くために。
今よりもっと見やすく、もっと身近な情報
発信を目指します。



句集 くらしお 第四集

私家版

発行 藍生高知かんざし句会
A O I 高知 M I R A I

A5判 一六七頁

句歴も年齢も様々なメンバーがそれぞれに刺激し合って磨き上げられた句がそろっています。味わい深いものから、少しくスツとほっこりするものまで、その内容も様々。俳句になじみのない方にもおすすめしたい一冊です。

！ 出版物紹介

鐔は知っている
つば 土佐の幕末維新

A5判 一八四頁

著者 小島博明
発行 一般財団法人 坂本龍馬財団

定価 一、五〇〇円(税別)



『一心不乱に』という名を持つ鐔が二枚ありました。その意匠は幕府への忠誠心を表しており、山内家の家宝でした。幕末、そのうちの一枚が後藤象二郎と共にあったのです。『いろは丸事件』の謎とその真相は？ 『龍馬暗殺』の謎とその真相は？

退職を機に土佐の歴史を研究するようになった著者は、歴史資料を通してその声を聞き、隠された真実に迫ろうとしています。

価格のないものは販売できません。貸出はいたします。

印刷屋さんの
「すったもんだ」



ひょんな事から、高知市文化振興事業団の方に「高齢者教室」の講義依頼をいただいた。

数十年来のお付き合いで、日頃から色々とお世話になっている経緯もある中で、僥倖ながらやらせていただく事にした。が、よくよく話を聞いてみると、なんと1時間30分もの講義だという。流石に自分の中で「おい……いけるのか」と自問自答したが、逆にこんなチャンスはそうあるものでもない。

講義の内容は「自分史あれこれ」。当社が出版室を開設してから27年。先輩たちが培ってきたノウハウを活かすことができれば、この上ないことである。

この記事を書いている時点では、講義当日まであと2週間、聞けば100名弱の申し込みがあるという。

さてどうなるのか？ それは次回のかかわら版で……。

(永野正将)

わが家の太郎 25

ひと騒動

永野 雅子

2月のある日、太郎をくださった夫の友人ご夫妻から食事に招待された。

フランス料理においしいワインを戴きながら、夫の思い出話や太郎の話に時の経つのも忘れる至福の時間を過ごしていたら、マナーモードにしてある携帯電話が何度も「ツー、ツー」と鳴っている。

こんな時に野暮な電話と、そのままにしていた。

楽しい時間も過ぎて、帰りの車中で、何気なく先程から鳴っていた電話にかけると、なんとお隣りの奥さんで、太郎が脱出して預かってくれているという。

至福の時が一拳に現実に戻った。

家に着くと、玄関や台所の扉に、「太郎ちゃんを預かっています」と、貼り紙がある。

急いで迎えに行くと、太郎はお

隣りの車庫で座っていた。

聞けば、奥さんが愛犬と遊んでいて振り向くと、開いていた居間のガラス戸から太郎が中に入ってきていたというわけ。

何度私の家に電話をしたけれど出ないので、娘さんが「おばちゃん、家の中で倒れてないだろうか」

と、心配していたら、やはり近所に住む夫の友人が、

「車が無いのなら出かけちゅうろう」

ということ、携帯にかけてくれたらしい。

何とも申し訳ないやら面目ないやら……。

さて翌日、一体どこから脱出したかと、太郎をリードでつないで

おいて、庭中を点検する。

どこも脱出できそうな所はないけれど、一箇所、隅の方のネット

がゆるんでいた。

でも、そこから出るには、太郎の大きさではよほど時間をかけてくぐりぬけた上、塀の上に出て、今度はお隣りの家の隙間からもぐり込む形になる。

夫が丹念にコンクリートにドリルで留めつけた柵にネットをしっかり張ってあるので、そこから出るとは思いもしなかった。

このままでは、一度出られることを学習した太郎は再挑戦しかねない。

早速、知り合いの大工さんに来てもらって修繕を頼むことにした。

大工さんも、

「これは知能犯じゃねえ」

それにしても太郎ちゃん、人騒がせな上に、物やりなこと！

(ながの まさこ/常務取締役)



大谷公園の桜と太郎